— 京都市ごみ減量推進会議 —

こごみ日和

～みんなでごみゼロ～

No.48 2011.夏

家の中に森を運ぶ。若吉浩司さんの試み。

今回はアメリカから帰国後、精華町で家具工房を営む若吉浩司さんのスタジオを訪ね、1本の木を通して私たちの暮らしに広がる新しい価値観を魅力的に語っていただきました。

2006年に帰国されて京都府精華町に工房を設けられましたね。

「私は以前、京都市内に住んでいたのですがその後アメリカに渡り、帰国後精華町に移り住みました。たまたまそこで製材所が見つかり製材機械も手直しして仕事を始めました。精華町に住んで見えてきたものは、ベッドタウンに暮らす多様な世代の人々、そして近隣に豊かな緑が広がっていたことです。コナラ、楠、榎、クヌギなど多様な樹木が存在しており，私の仕事に適した環境が整っているとすぐに感じました。いい材料が手に入る環境があったということです。地域環境にいきもの（樹木もいきものです）が豊かだと、想像力もわくのです。それは生活する人すべてに言えることです。」

多様な樹木にちゃんと目をやるということですね。

「その時、私は近隣の木と向き合って生きて行きたいと考えました。「木」は加工されて家具に姿を変えても「いのち」はその家具に宿り続けます。毎日の生活を育んでくれる家具と共に暮らす喜びを感じていただければと考えています。家具を家族の一員として迎えてやっていただきたいのです。」

木にも多様な個性があるというお話を聞かせてください。

「例えばウォーミーチェストナットという「虫食い栗」の材木があります。虫に食われた穴を負の要素として見るのではなく、欧米ではそれを「柄」としてデザインに利用しています。この様な価値観の違いから利用価値も生まれてくる訳です。日本には多様な風土の中にあたりまえの様に色々な樹木が生育しています。正倉院の宝物の工芸品にはさまざまな樹木が利用されていました。しかし現在流通している樹木はごく限られた品種のものでそれ以外の樹種は利用価値を無くしています、むしろ私はそんな木に心を惹かれるのです。」

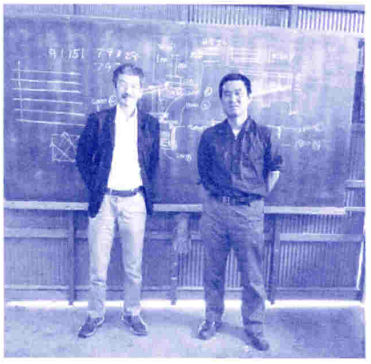
クヌギで作ったアメリカン・ウィンザーチェア

大型ごみとして家具が捨てられている光景も目にしますが。

「私から見ればまだまだ使えるものが多いのです。例えばウィンザーチェアといって喫茶店などでもよく見かける椅子なども、座面が割れたというだけで捨てられています。それらのものも少し手を加える事で再生できるのです。修理、リフィニッシュも職人の仕事のひとつなのです。」

まだまだ使えるものを簡単に捨ててきた訳ですね。今後のお仕事の夢は何でしょうか？

「家に森を運ぶ事です。街に住んでいると自然の中に身を置く機会が少なくなります。私の夢は樹木の個性を生かし家具を作る、森と人間の間で仕事をする事です。」



ところで京都市内には小さな三角公園がたくさんあります。そんなところに置かれても楽しいですね。

「そうですね、例えばきれいな花が咲く木だけでなく（すべての木は花を咲かせます）、その地域で身近に生育してきた樹木を植えて、その木がどういう木であるかを紹介する。そしてその生まれ代りの家具や遊具を置き、親しみを持つ事で町の人と木を共存させるなんてどうでしょう。」

参加型まちづくりのよい見本になりますね。やりましょう。

「ええ、ワークショップでみんなで公園をつくる。そんなことが実現するなら是非呼んでください。私がつくったおもちゃなんかも見てもらいます。今日は本当に楽しかったです。次の機会を楽しみにしています。ありがとうございました。」

「精華スタジオ」http://www.kojiwakayoshi.com/ （080-5321-9905）

取材：大橋正明

特　集

自然の力、人間の力
～東日本大震災から考える～

京都大学環境科学センター助教
京都市ごみ減量推進会議理事
3R・低炭素社会検定実行委員長
浅利　美鈴

凍えそうな雪の中、肩寄せ合って避難所でしのいだ地震・津波発生当初は、夏が来るとはとても思えなかったに違いない。しかし、ちゃんと春が来て桜が咲き、夏が来て蝉が鳴く。自然の力はすごい。

◆現地派遣メンバーとして

私は、3 月 25 日の夜、京都市から現地支援に派遣される陣（環境政策局約 20 名）とともに、京都市役所前をバスで出て、仙台市入りした。学会（廃棄物資源循環学会）の特別チームの現地派遣メンバーという位置づけである。そこから、「災害ごみ」との戦いが始まる。当時、滞在させて頂いた仙台市役所内では、不眠不休で復旧作業が行われていた。また、被災エリアは、まだ人命捜査の真只中にあり、調査や研究などができる状況ではなかった。それは震災発生当初から心していたことであるが、学会の立場とは言え、何か現地の役に立つことを…と、現地を確認した上で、今回の災害廃棄物への対処策の立案支援（そのためのマニュアル整備）にとりかかった。

津波倒壊家屋が漂着した場所

◆今までになかった「津波ごみ」

現地確認のため、沿岸部に足を延ばすと、今までに見たことのないような景色が広がっていた。土台を残して消えてしまった集落、津波が海底から巻きあげてきた泥に覆われた田んぼ、ぐしゃぐしゃにつぶれた自動車、なぎ倒された電柱、ガレキになった家屋・・・これが自然の力というものか。その威力を思い知らされた。「環境や自然に優しい」をキャッチフレーズにしていたのは、人の完全なおごりとしか思えなかった。

街に乗り上げた船（石巻）

今回の「災害ごみ」への対応が困難を極めているのは、やはり「津波」の影響である。その特徴を列挙すると・・・

- 津波の力で押しつぶされたり、何から何まで入り混じった状態になったりしている（一部は人命捜査時に、重機等で更にまぜたり、破壊されたりしている）
- 津波によって巻き上げられた海底堆積物が積もっているところや、付着している廃棄物などもある
- 海水を被った廃棄物もある
- 引き波で海に行ってしまった廃棄物も多い

また、破壊された街を歩いていて改めて感じたのは、私たちの暮らしがいかに多くの物に囲まれているか・・・「シンプル」や「スマート」とは、ほど遠い。歴史的に繰り返してきた自然災害だが、おそらく昔は災害ごみも、様々な形で自然にかえっていったはずである。それが今は、気をつけなければならないごみ、分けなければならないごみ、更にはどう処理すれば良いかわからないごみが、まさに山積している。これを教訓に、今こそ、市民・事業者・行政が知恵を繋ぐ「京都市ごみ減量推進会議」の出番と感じた。

◆試される「人間の力」

しかし、自然との対比の中で、人の力も改めて感じた。立ち上がる力、しなやかな助け合いの力が現地にはあった。例をあげると切りがないが・・・

一次集積所で分別されている有害・危険物

- 多くの避難所では、多くのボランティアや避難者自らが、きちんとごみ分別を行い、衛生状態が保たれていた。「津波ごみ」についても、分別が進められている。この状態を、写真を見せながら海外の人に説明すると、「日本人はこんなときでも、こんなに分別するのか！」と、かなり驚かれる。10 年以上培ってきた 3R の習慣や技術が活きるときである。これが復旧・復興の一歩になり、証にもなる。
- 多くの都市や自衛隊などから応援が入っているが、みな、街を歩いていると互いに挨拶し、「お疲れ様です」「ありがとうございます」などと声を掛け合う。何かの CM ではないが、本当に一つのチームのように感じられた。なお、特に京都市からの支援は早く、現地での存在感も大きく、誇らしく思った。
- 現地で一度だけ怖い思いをしたのは、4 月 7 日の大きな余震である。実害もあった。これで、再び振り出しに戻った復旧作業も多くあったのだ。本当に人間の気力を試されているように感じた。一時は、落ち込んだ人も多かったが、間もなく立ち上がっていた。東北ならではの強さとも言えるかもしれない。

◆京都でできること

今「被災地」というと、東北を中心とした東日本を思い浮かべてしまうが、日本列島、いつどこで何があってもおかしくない。もちろん京都も。ここで地震があったらどうなるか、そのときどうすれば良いか、びくびくすることはないが、想像しておくことは重要だと思う。まさに「備えあれば憂いなし」。

また、長く続けられる形で被災地を応援することも考えなければならない。毎年夏に開催している「びっくり！エコ 100 選」は、今年も京都タカシマヤで 8 月 5 ～ 9 日に開催するが、ここでも子供たちを中心とした交流や支援を行う。復旧･復興には数十年を要するだろう。世代を超えて、支える力も伝えねばならない。

シリーズ

「みんなで考える」

「エネルギーともっと仲良く！これからの明るい暮らし方をご提案します！」

取　材：濱　　惠介さん（エコ住宅研究家）
酒井　正治さん（地球環境イニシアティブ（GEIN））
聞き手：大橋　正明さん（みんなのヴィジョン創造研究所代表）

「電力は有限のエネルギー」、日本中の誰もが痛感し、将来への不安を浮き彫りにした原子力発電所の未曾有の事態。これまで通りの生活ができなくなる？どうすれば原子力エネルギーに頼り過ぎない社会が創れるの？メディアから連日のように不安の声が聞こえてきます。しかし、今の暮らし方を少し工夫すれば、エネルギーの消費を確実に減らすことができます。まずは、私たちがエネルギー節約術を身に付け、日本の未来を賢いエネルギー社会に変える、その第一歩を踏み出しましょう。

大橋：さて、夏の暑さが本格化する季節を迎え、私たちの省エネ意識もますます高まってきましたが、暑い日でも快適に過ごしたいのは、私たちの共通の願いです。では、具体的にはどんな工夫をしたらいいのか。これからのエネルギーとの付き合い方も含めて、お二人からお話を伺いたいと思います。

酒井：私は東日本大震災後も東京で仕事をしていますが、東京から京都に来て、建物の照明が非常に明るいなと感じました。震災の影響で電力の供給が止まる事態を経験し、これまで以上に電気の使い方について意識するようになったのです。照明は、必要最小限の明るさでいい。慣れてくると、少しうす暗い方が落ち着きますね。

濱　　惠介さん

濱　：“必要のない電気のコンセントは抜こう”という呼び掛けなども随分と耳にしました。このような意識はもちろん大切ですが、日々の暮らしをじっくり見渡すと、たくさんのエネルギーの無駄づかいに気が付くものです。原子力発電所の大惨事を目の当たりにし、これまでのエネルギーの常識は通用しなくなりました。いかに少ないエネルギーで、豊かな暮らしを楽しむかを考え、これまでのように“便利で豊かな”暮らしを追い求めるのは終わりです。今一度、エネルギーとの付き合い方を賢く見直し、新しい生活文化を築く、その分岐点に立たされていると言えます。

大橋：20 世紀後半、私たちは物質の豊かさこそが幸せだと信じ、欲望のままに経済優先社会を発展させてきました。それに伴い、電力などのエネルギー生産量も増加を続け、日常生活において「電気が無くなる」ことを心配する時代は過ぎたかに見えました。

濱　：しかし、そのまさかの「電気が足りないかも」という危機が現実化したわけです。でも、少し考えてみてください。私たちが今使っているエネルギー源は、ウランや石炭、天然ガスなどの天然資源です。

酒井：それらの資源から得るエネルギーは枯渇性エネルギーとも言われ、試算によって若干の誤差 はありますが、あと 50 年このままの勢いで使い続けると、ウラン・天然ガスの大部分は経済性を失い、採掘を続行できなくなります。つまり、原子力発電を続行する、しないに関わらず、近い将来、確実に原子力発電に代わる発電システム、更に言うと社会のシステムが重要になってくるのです。

大橋：これまでの価値観を引きずった、つまり欲しいものが欲しいだけ手に入る時代は終わったというわけですね。

酒井　正治さん

濱　：そうです、手当たりしだい資源を使い、やっかいなごみを残す、そんな時代は終わりにしなければなりません。後世にも残されるべき資源を短期間で使用することは、言わば未来世代からの窃盗といっても過言ではありません。そのような行為がいつまでも許されるはずがない。私はこの 20 年ほど環境と調和する住宅のあり方を真剣に考えてきましたが、そ

の発端はバブルで浮き立つ日本社会の異様さでした。その延長から、いかに少ないエネルギーで快適な暮らしが実現できるか、研究してきました。頭で考えるだけでなく、実際に自宅を改築し、私なりのエコライフの実践も積み重ねて来ました。その体験から、皆さんにお伝えできることがたくさんあります。

大橋：最近では、小学校や住宅でもゴーヤで緑のカーテンを作る取組が広がっていますが、そんな小さな取組も含めてどんな省エネ術があるのでしょうか？

濱　：皆さんがご存じの通り、よしずやすだれは、直射日光を遮り室温が上がるのを防いでくれます。昔ながらの知恵ですね。外部ブラインドやオーニング（日よけ用のシート製の庇）の設置も効果的です。ポイントは、直射日光を室内に入れないこと。また、建物自体を温めないことも重要で、ブラインドを窓の外側に吊るしたり、ゴーヤやヘチマなどのツル性の植物を壁面に育てるのも水の蒸散作用も加わって効果は絶大です。
また、屋上やベランダでサツマイモなどの植物を育てるのも建物の温度を下げる効果があります。このような植物を使った緑化は、見た目にも涼しく、食べ物の収穫もでき、まさに良いことずくめです。

大橋：照明についてはどんな工夫をすればいいのでしょうか。

濱　：皆さんはご家庭でどんな電球をお使いですか？まだ白熱電球をお使いでしたら、買い替えの際に電球型蛍光灯を選んでみてください。例えば、60W の白熱電球を蛍光灯に変えるとたった 12W で同じ明るさが保てます。最近話題の LED（発光ダイオード）電球は更に消費電力が少なく将来性が期待されていますが、まだ値段が高いのが課題ですね。

酒井：読書やデスクワークなど、手元に充分な明かりがあれば良い時は、読書灯の利用をお薦めします。部屋全体を明るくすると、それだけ電力を使いますし、電球からの放熱によって部屋の温度が上がる原因にもなります。

大橋：なるほど、照明を工夫することで室温も下がり、一石二鳥ですね。

濱　：また、個人の住宅に太陽光発電パネルの設置を促す法整備も重要になってきます。現在、余剰電力の買取単価が引き上げられ、以前より有利になりましたが、EU 諸国ほど電力会社への法的強制力はありません。更に将来を見据えた議論が必要です。太陽光発電パネルなど、自然エネルギー利用が増加することで、関連する産業に雇用も生まれます。自宅が小さな発電所になることで、家庭での省エネ意識がますます高まりますよ。

大橋：新しいエネルギーとの付き合い方が見えてきましたね。

濱　：我が家では、庭の木を剪定した時に出る枝葉も熱エネルギーとして利用します。また、調理の時に出る野菜くずは、細かく刻んで庭の土と混ぜてそのまま肥料に。自然の物に無駄なところはありません。“太陽エネルギーの恵みの範囲で暮らす”、それが自然の摂理であり、私たちの新しくて懐かしい生活スタイルの目標になると思うのです。

大橋：家電製品に頼り、ごみは分けずにまとめてごみ袋へ入れてぽんと出す…そんな機械的な暮らし方ではなく、ちょっと頭を使って、手間をかけて楽しみながら、自分らしい暮らしを作っていく、この発想への転換が、日本の新しいエネルギー社会の基盤となるのですね。

濱　：その通りです。ぜひ“太陽エネルギーの恵みに感謝して暮らす”ことを実践して欲しい。リタイヤされるなど自由時間がたっぷりある方は里山に入って木を切ったり、土を耕し野菜を育てたりするとよい。自然に向き合う活動で健康になり、地域が美しく元気になります。これからの社会を作っていく若い世代は、今の暮らしを当たり前だと思わず、無駄の少なかった昔の暮らしに学んでほしいです。

酒井：子どもの頃に遊んだ自然がいっぱいの場所、それを未来の子どもたちにも残したい。
レイチェル・カーソン女史が唱えた「センス・オブ・ワンダー」の世界観は、私たちの暮らしが太陽と繋がっているという意識の中で分かち合えるものだと思います。

大橋：エネルギー文化の再生は、環境にも、地域社会にも活力を見出します。本日は貴重なお話をありがとうございました。

取材日：平成 23 年 4 月 30 日
取　材：松村　香代子

○参考書籍○ 濱　恵介著『エコ住宅でエコライフ～環境を守り愉快に住む実践録 / 設計ガイド』
発行：クリエテ関西

京のこの人にインタビュー

藤城の魅力は、豊かな人財！

～藤城学区地域ごみ減量推進会議～

京都市伏見区にある藤城小学校は、伏見桃山城や北堀公園に囲まれ、豊かな自然に恵まれています。この小学校では児童の保護者や地域の方々が度々訪れ、地域活動の拠点として、また情報発信の場として、様々な取組を行っています。今回は、長年地域に根差した学校創りに取組んでおられる、藤城学区地域ごみ減量推進会議（以下、藤城学区地域ごみ減）の髙橋猛さん、松井順子さんに、藤城学区の元気の秘密を伺いました。

庶務の松井さん、会計の高橋さん

藤城学区地域ごみ減が発足したのは、平成22年度。小学校のPTAや自治連合会、体育振興会、保健協議会、地域女性会等、10を超す団体の代表によって立ち上げられました。「一つの団体で活動するよりも、地域を挙げて取り組んだ方が良い成果に繋がる」と髙橋さん。「藤城は、学校と地域との距離がとても近いんですよ」とにこやかにお話しくださいました。これには、歴代の学校長のご努力もあり、積極的に小学校を地域に開放し、その結果、情報交換の場として、また新たな出会いの場として、大いに活用されるようになりました。『地域の子どもは、地域で育てる』、この考え方が浸透することで、笑い声の絶えない、明るい学校が生まれました。地域で活動する方々のトレードマークである、薄いやまざくら色の上着を身に付けていると、行きかう子どもたちは皆元気に挨拶をしてくれます。地域の花、山桜のピンク色も、皆さんの活動に華を添えています。

藤城学区では、小学校周辺の花壇の手入れや、グラウンド近くの竹やぶの整備など、地域の方々の自主的な協力によって、学びの環境が気持ち良く保たれています。髙橋さんは、朝早く校区を歩きながら、このように“当たり前”に地域を守ってくださる方々に挨拶をされるそうです。「長年、何の見返りも期待せずに頑張ってくださる皆さんの功績を、何らかの形で表彰したい」と、地域活動の原点とも言える日々の地道な活動を、多くの人に知って頂く機会を模索されています。ついつい派手な活動ばかりに目が行きがちなボランティア活動ですが、本当の地域力とは、言われずとも他者のことを思いやって自主的に動く、その心遣いにあるのだ、との思いに感銘を受けました。

小学校の植え込みは、地域の方の作品です

また、毎年開催される夏祭りやもちつき大会などでは、そのイベントを支える地域の方が必ずいらっしゃいます。「しんどいことだけでは絶対に続かない、スタッフみんながイベントに参加して、あそこに行って楽しかった、また来年も参加したいと思って頂ける運営を目指しています」と力強く語ってくださったのは松井さん。販売する食べ物の味にとことんこだわる、またリユース食器を導入するなど、活動の意義をスタッフと共有し、実行することで、次の活動への参加意識も高まります。更に松井さんは、地域・家庭をむすぶ「藤城やまざくら通信」の編集・発行を毎月担当されており、発行号数はこの7月で何と110号を数えます。ピンク色の紙面には、小学校からの毎月の活動報告をはじめ、藤城児童館やPTAの取組など、各団体の活動の様子が分かりやすくまとめられており、地域の広報誌として、子どもから高齢者まで、幅広いニーズに応えています。

地域の方の協力によって、美しく保たれています

昨年の12月に完成した落ち葉の堆肥化施設も、地域に住む宮大工の棟梁を中心に、各団体の皆様の協力によって実現しました。堆肥化施設の木の枠組みには、宮大工さんの技とこだわりが伺えます。丹精込めて造られた、その施設の立派な仕上がりにはただただ圧倒されました。完成時には児童たちも落ち葉を集め、現在堆肥化に向けて試行錯誤が行われています。「地域には、私たちが必要とする技術や知識を持った専門家がたくさんいらっしゃいます。新しい取組を通して、地域の貴重な人財と出会い、そのノウハウを地域や学校に活かし、藤城の魅力作りに繋げたい」と髙橋さんは瞳をきらきらさせて語ってくださいました。

宮大工の棟梁を中心に施行した落ち葉堆肥化施設

最後に、髙橋さんたちの夢をご紹介しましょう。それは、藤城学区の道端に花をたくさん咲かせて、多くの方に楽しんで頂くことです。小学校で作った堆肥を活用し、地域の高齢者が花壇の世話をすることで、世代を越えた繋がりが生まれます。新たな出会いも期待できます。「藤城ロマンティック街道」が実現する頃には、藤城の元気、そして魅力は益々深まり、“ずっと住みたい町”として多くの人々に愛されることでしょう。

取材日：平成23年4月25日
取　材：松村　香代子

～みんなの手づくりざぶとんを被災地に～

「ぬくもりざぶとんを贈る運動」

3月11日、想像を超える大きな地震と津波が発生し、誰もが「何かしたい、何ができるのか・・・」と考える中、この会報誌の企画編集スタッフの中から、手づくりのざぶとんを作って被災地へ届けてはどうかという意見が出た。

テレビに映る避難所は、プライバシーの無い、居場所の定まらない広い空間。

ざぶとんは、置くだけで自分だけの空間ができ、半分に折れば「枕」、そしてできたてのふかふかのざぶとんを抱けば、その柔らかさに一瞬でも心がなごむのでは・・・。

そんな思いを込めて準備を始めた取組は、会場を快く提供いただいた室町児童館の楠館長、働きかけを行っていただいた室町地域ごみ減量推進会議の織田会長、そして私たちスタッフに手取り足取り丁寧にざぶとんづくりを教えてくださった京都の老舗ふとん店「丸岡屋ふとん店」の宇野さんなど、多くの人にご協力いただき開催することができました。

上京エコまちステーションから声をかけていただき、是非参加したいと声を上げてくださったのが、成逸地域ごみ減量推進会議のみなさん。また、京都新聞で取り上げていただいたこともあり、京都市内だけでなく亀岡市からもご参加いただき、延べ19名の方と一緒に、ざぶとんをつくりました。

綿100%のふっかふかのざぶとんを作りながら、家にあるお布団の綿で、自分のざぶとんも作ってみるわ！という声をたくさん聞くことができ、被災地だけでなく京都にもあったかざぶとんの輪が広がり、とてもうれしく思いました。

出来上がった45個のざぶとんは5月31日、ご自身も被災者でありながら、この取組を現地で支えてくださった、3R・低炭素社会検定合格者の佐々木一郎さん（仙台市在住）と共に、スタッフが直接被災者の方に届けました。

石巻市の避難所の、段ボールで仕切られた窮屈なスペースで、多くの方がまだまだ大変な生活を送っておられる現状を見て、改めて、被災地をさまざまな形で長く応援していく必要性を強く感じました。

ぬくもりざぶとんを贈る運動　スタッフ

事務局より

この夏は、これまで意識していた人も、そうでなかった人も、意識せざるを得ない節電。うちわ（竹製は手の疲れが少ない）、うずまきの蚊取り線香、打ち水のバケツ（お風呂の水や雨水利用で）、氷枕等々、ほんの30年前には、当たり前にあったものを、今年だけでなく、もう一度当たり前にしたいですね。
職場でも自宅でも、濡らしたタオルを首に巻くスタイルで、この夏を少しでも快適に過ごしましょう！

京都市ごみ減量推進会議会報誌　こごみ日和　No.48

〒612-0031　京都市伏見区深草池ノ内町13
京エコロジーセンター活動支援室内
TEL:075-647-3444／FAX:075-641-2971
E-mail: gomigen@mbox.kyoto-inet.or.jp
URL: http://web.kyoto-inet.or.jp/org/gomigen/index.html

ゴミゲン・ネット　検索　で検索出来ます

【入会のご案内】

京都市ごみ減量推進会議は、京都市のごみを減らし、環境を大切にしたまちと暮らしの実現に寄与することを目的として、市民団体、事業者、行政により1996年11月に設立した団体です。パートナーシップで多彩な活動を展開中。京都市ごみ減量推進会議では、ともに活動をする会員を募っています。

詳細は、事務局へ問い合わせください。TEL：075-647-3444

企画編集:京都市ごみ減量推進会議　普及啓発実行委員会
（会報誌・ホームページ小委員会）

古紙を含む再生紙に大豆インクで印刷しています。　PRINTED WITH SOY INK